

9
8
7
6
5
4
3
2
1
mm

9
8
7
6
5
4
3
2
1
mm

100
90
80
70
60
50
40
30
20
10
mm

9
8
7
6
5
4
3
2
1
mm

尾張迺家芑
一之上



おもてあひ席に六度集鏡をす。事ありき。其
中に載る鏡面玉は、の附玉用ひと申す。此
て珍しき。まことに、そのと見ゆべ。こゝ
タリと身をうそす。又、いがむあらとも
こゝとども、の説得り。尾をくわ
あ。持幕紙は、とくとく。おおの、さう。
また、つづく。あらわすが、我らよそへ、とまこと
あ。すくやかに、玉いよいよ。ひも、と佛像と
りまのと見ゆべ。とて、ひしのひきこの新作の表
ひき。諸宗乃祖師。こうぞおの廣く

かくある事とえりてかくも計をすらじて
是すから佛心まじりとありしといふて
て瓦をと壁をすとすとをいとひやとかの瞽
者の足をうち尾とぞして象をうへるのなりと
うそとひのひのこ毛誠もうち李
れ道も入がきそききそりあき世の風を
まひそりあひへばそりは義叢說法とあまき
うちたれあくとけたきりとて後感をまわ
を秋草とすあめあめむ奇者荒とすめ何乃
先生くわの家近づく彼象の口庭をよせう

えくもゑりとむじてしやうの間ひかく多々
新きことありしは汝の卿ひよぢりといふて笑
ゆるんといひとくらべて少んぬに至るえ生を
せんれう特賢卓識の見解をじ集と
彌とよきてる事もよやすらうといたゞく
されど七寶漢森はうにて十二音樂とすと
人ゆす打ひゆすりは多くは構化出の様
根をうやねまことに空くわくとくらまつ
正前にうひ草あくにうかまくとくらまつ
が同の目をきてくらうと全貌を見

トヤレシナハアモテアヘテアシルモ鏡面王ニ
ヒタチトシナヤ西ノ、シテモアシルモヨシ浅きシ後ラ
トシヨリ正定取取不退轉ナリソニ往キシムヒ
トテ誠ニ素れお法モスルトシケヌトキ
クノ桂木納リて御の草トヒ、草トキ墨モ
ナリモ計はシムトシム。御聞経覺モトトキア
サトシテ片野ノ何ナリヒシ尾張の木苞ト
名モテ桂木ニスルモトシム。衣被はシテアキ明
遍ノナガ世界の奇シムの底モトテアキ
度のナシナモトモナレシテアシルあるトコト高

文政二年四月

石鷲山後

尾張遊家卷二



正後う尾張の回りまかで何ぐれといひ事
の十ホ新古今集の歌よのうひととなんと
るるすすよといあはふはいもうひじとせふ
かくは圓ふ人じんかつてく書もすもえほせふ
へうまく小かきであふ

萬葉集おととふはめでたき本ひもてたれとと附よもち
見くわせあひておもす新古今集のよび歌なんむ
まをく則くおもすれや歌をくわいわすりて轍
くわくたれときほく三宿ましれ音のふうしよ。此

本居先生のいふ家風かんばる義雄のなまやでよがねば
あれ。かつてもあらわすかれとしゆよされを高ぶるは
わらわくもありそあらぬ事ふせむにかとも人
とちやうさんじんじんしらはすよ人のうみゆだ
事すりあらき。我へそそわむととすうそおま
坐つるどよのまくわらひと後葉を家へはる
の名道ならどくよまきそようじれを。よよすと總
いくまもとす。取あたる見解一をくわくのまく
きくわくわく。以後うわめしゆゆくわくよ。うわくやさ
とぞ。おふくよまきそよまくわくわくすすむ

とくとく此先生の墨蹟。ソノシテシテシテシテシテシテ
右今集の三十九歌と一首の口調をせしたくのふ
ほ半を、半を、半を、半を、半を、半を、半を、
あめ一首のつぶる幽玄とて、わくとくはまむ不景。
きみけをすし。泣哭をこじり。泣哭をこじり。泣哭をこじり。
つづく。やまく。百般のあめり。だまく。きりとす
ときりと。詩人のいふ雄偉流暢豪壯新奇といふ
らくを常とせむ。の新奇をもすむふくゑす小
聲を以てす。にいよるやとせむく。うなぎく。あ
わく。それと假りて玉とすん事を以て。金き毛

をゆりにゆりしも。ひめひ文治トウ延保までの先主は。
地をしづして尼寺。馬家。大久も時の名遁てせよ。され
たが歌とまよ。秀逸抜羣する歌へととく。ばらばる
危機のよそ縁の辯と取あつて。上でしげわくすすと
くやぶる。終身一伴の令きをも。けふよふらむ。い
てとぎくや。まだこのれのまゆ。本居先生。お学事
尔す。萬葉以下の書よ述て。うなぎ又是す。信。抜羣
の徳りもべきを。おしげ合々とふくよむと。峰を
一。湯をくらむ。とくね。たまひの水。すてて。大海の浦を
福

の河代配當を観組や。は。為家の創立れど。まがる是
つよや。かく。ふき。みきでの執り。はすそ。はるの後後兵。おま
はる目と聞て。ふきを事より。はつす。彼を。の風の響を。お
こして。おと風を。かく。かく。おと風を。かく。おと風を。おと風を。
おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。
おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。おと風を。

おとづりへ思をうつす日淺とてよしれのうれ
さんや思ひす。ほんやくよじ先生の是非を、ほん本ハ
うそ。浅瀬のあゆとまゆをも車もやまへ。とほれ
と水底にまばゆの流よみたのゆ、うんきすられ。
ヨリひきこよのゆ、人をすとひもあうて定て
よき。たゞ、数量れたら事もあり。岡部の事があ
やまきをれり。されば、事の述もよき。ほんもあ
しめほしもあひ起してほん。ああアシ。

新古今集

春歌上

春の歌をさむはう 横政太政大臣

みずせを山うすみて雪のやす。ゆまとひ牛ひなう
初匂はり。いはゆるかく。ひよふ。ちよほとさあひいれ
うきてたゞかく。ひよひきてがひ。ひよしやくわんばよひつる
ゆまと。里も春ひ集ひ。かわくさきあくさく奇をと。二事や山ひを
いた。ほの寝ねの寝ね寝ね寝ね寝ね寝ね寝ね寝ね寝ね
あよほよ。右人の間まを用ひたすも。かくはまとも。かくは
まくのとひひき。山ひの山ひ大切をひだり。かくはまくのとひひ
せなむと。ひがうり。山ひとひて。かくはまくのとひひ
ゆかうせ。かくはまく。手えハ酒をさほん。かくはまくのとひひ
かくはまく。下よひきり。をよひ。かくはまくのとひひ
あひげかく。かくはまく。かくはまく。かくはまく。かくはまく
ことかく。かくはまく。おのへ國へあひ。かくはまく。かくはまく。奇の會
あり。け。豆柄の豆のへき山ひと相あひまくのとひひ。豆柄

やとおきて・墨病のひひで・竹の下に墨病とて書をこしらへと散る。
と偽り筆を立ぢ・程故先生の遺稿・そのまゝハメテ・山に見え
けあるをちの海へ在す。假りて・喜う事もあらず・白
雪ハうち山の序のまゝ。近日こそちのやうすをりせん。

春の始のむか

太上天尊御勅

物語りす・なほひづれり・二の句つてきそくろ
うへと・やのやのをえと・山の名は天とふね
照して・天・山の名の何とくは一言もあぬ・うらも・こそのま
とあら・わら・ば集のひのひ・とてうるわすをあたる
處のすあり・ば集のひのひ・とてうるわすをあたる
わゆり・天と空とを合はり・とくに・よしと・ふくが氣のを
費さるをきふづれ・ば集のひ・自在をれびと照夜をまつも。

百首奇第一附の歌或子内親王

山あうと春よしすねねの戸尔なむ・ぐる雪は玉もい
まよとあうねねとつきとも・趣の外の世のあひも。
林よあうねねとつきとも・とあめ・まよしもあねね・いのち匂ひう
とうるへき・まよのくたは葉の戸と不とけり・べきのき・ハ跡とがめ・おれ
まよのきとあら・が・まよ・ハ山うほき・者とノリ・と何・うりやと・おのた
まよの玉水うほき・が・まよ・と不と・を・け・山のうとたき・ハま
まよの玉水うほき・が・まよ・と不と・を・け・山のうとたき・ハま
さだくも・うつ・まよ・と・まよのあ・お・い・う・がのやう・まよ・と・まよ・わう・牛
え・お・お・さく・個・ち・き・を
り・そ・ば・貫・の・筋・と・そ・

五十首歌年一付

宮内

うみ・ア・ねる・この・おの・中・お跡・うそ・ま・聲・ハ・馬・ま・わ
人の・の・もの・と・お・か・れ・よ・あ・つ・れ・は・お・れ・と・お・の・と・
ま・ま・じ・へ・る・人・か・ま・と・あ・シ・わ・う・ま・ま・は・ま・ま・日・お・き・

入道前幕白書人臣作詞附百首歌よせ候
はる春者のごろを 室太庵本支後成
かくとくもあこ見てもひ春を都尔のまことひのうえ
二三の句のみ余に候ひがくやううておれを。大
寝歌はほうちもくまとめの秋の匂のふくわすは
の月をりてかたどりけむよとおまを。元となりら爲
五春の歌より者といふ。音量のがくすうねじ
まことひのうとおまを。おれしとあまよだまといふ。ふ
へきれひと人のくもみのく人に歌ひよまし。人びと
ゆきだよとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
ゆきまともとお門よんれいはうと。例が精めよのわるを。うる
けり。深海をもみハ徒不列。ども。あつまわらやこすてハ事も難
をきかず

題一奇

西りは節

岩居と一木とあたと付とお若のト木たれし淡
初カリ。わまづきよ。けは姫の歌は傳つねよ
おや。そりあまづきよ。は尾瀬。まのうをほまのむれ
あると。わざと一方や。おまづきよ。おとふたれ。おま
づきよ。おまづきよ。おとふたれ。おとふたれ。おとふたれ
は集の夷引きて。高せきを生じ。なまくらばとさき
不す。まあまわら。おとふたれの花粉のときとあへ
おとふたれ。おとふたれ。おとふたれ。おとふたれ。

そことへえいの事あわ。さかしんせうりは
もとこより上りおうへ金すくふ事ある岩らむあらう野火のひも
やあらねばほ跡のほづてこもへえどぬちりもくろえ
火の化けのかむらむかじんとけあるあくまくひやうなはれ
ばのたまむらげんとけぬよひくすみ半から哥のひまうをとれや
めうるまゆや一そのきハ若るまゆくも水うちき
とくまゆの木かうとくまゆを水まであ

述懷一百首より采後成

仄音あるあ来すわいづよ年をつし。神鷹
みのあつと。はすすゑき歌と。はなき例をわかれと。れ
いとし奇うる。キと。くわくは佐々木と。寺沈淪と。まと。ま
一そのまハ決ふよだる。事をつめんに。やと。神をやくと。ま
えれと。まよつと。キと。よと。神ひわき。かくと。

日吉社一とて。もあくる。子日の哥

ちかく。や。志安の後ねや。すうりと。よみの。日吉社

子日の哥と。きく。父。父を。碎。と。子。日。用。か。季。
宿。す。ハ。あ。母。の。こ。下。傳。歌。父。父。と。い。い。
の。比。そ。い。教。み。を。开。令。主。歌。と。孝。は。家。の。中。そ。れ。わ。り。家。
ひ。川。の。舟。今。そ。は。家。ふ。る。下。夕。ア。世。の。子。日。よ。し。る。る。
も。人。す。ま。ま。下。川。つ。ま。る。と。下。夕。ア。世。の。子。日。よ。し。る。る。
ら。し。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
す。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
は。れ。と。子。日。よ。と。き。よ。あ。は。れ。い。く。志。が。え。の。候。ね。ば。い。つ。の。子。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

百首歌年一付 藤原家隆明書
谷川のしおら浪。海。た。川。く。と。ほ。と。春。の。山。因。
本。歌。谷。因。よ。し。あ。海。や。ま。谷。因。よ。う。水。の。ひ。ま。こ。と。1
年。常。あ。ま。と。あ。れ。涼。き。歌。と。年。か。れ。う。と。

月の便ひがてモトテシハシナリ。アマサニ。れの便ひ
なうてモトテシ。といふハギツの日をもと。波ノ瀬、波ノ瀬
つねの事。先生本引のやく。とくに例をもと。波ノ瀬。
つねの事。もはもして立はせよ。山風。いふ風。

松井不吉と聞路聲といふ事。

太上天皇御教

、家のみすとも、降雪、木枝の寒木、逢坂の寒
借船、古く余船とせり。木、暮の夜の、而は、夷國をよ
け、のりし、たまは、帝の、りを、難、や、あきる、木、うち、借船を、
き難、と、あらへ、い、か、と、除、じ、たま、かへ、い、の、あつ、と、借
り舟、下り、下、上、難を、うふ、下、これ、まく、を、し、一、そ、き、ひ、等
、と、まく、舟、わから、も、あら、も、あら、ば、お、後、の、夏、の、枝、材、高、船、と、

家の首哥合、障壁 横政

室と云ふすと、風に吹て、ちよつと、音和の、
物の音と、するを、三、四の、ものへ、ゆかず、一、度も、す
と、と、ゆかず、と、ぶ附も、まと、ゆかず、と、ねじま
と、の、ちめを、ゆかず。、ゆかず、度より、き春の、月の、高
より、と、月を、く、予。、室、本、い、と、ゆ、も、月の、か、高、く、か
あん、と、く、と、く、上、の、る、よ、通、い、る、を、ほ、く、と、く、ハ、ま、く、と、
き、う、室、と、ほ、く、と、く、れ、わ、さ、と、く、や、一、そ、の、さ、ハ、室、か、く、す、ま、事、自、う、ほ、え
て、ま、の、月、う、も、う、と、く、て、能、を、も、く、は、て、こ、の、も、う、と、く、通、事、省、れ、た、う、能
事、を、く、や、と、あ、作者の、署、名、を、あ、は、れ、た、う、す、ら、す、き、聲、を、あ、れ、放、つ、あ、れ
れ、聲、色、の、文、を、だ、せ、る、と、今、き、ハ、く、ま、く、す、ま、き、を、い、て、下、も、く、と、

山あうと、行、は、堂、一、舟、の、室、う、き、う、り、う、雪、う、つ、
か、舟、不、吉、と、春、山、月、 越前

春のさけとひるみ。すみをすし。春とよもやわく。
冬の月のはま。とて。赤ハナリ。とて。降れ。まよだ。赤ハナリ。わく。
五の月のあや。かとあるがのやり。をそり。まよだ。とて。う。とて。
なうり。とて。あ。まよだ。まく。じゆ。まよだ。とて。まよだ。とて。う。とて。
まほの字。照。そ。山。は。さ。ま。と。ま。と。ま。と。ま。と。ま。と。ま。と。ま。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。
まよだ。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。とて。

詩をつうせで寄よあくせけ。小水。春印

たまに鶴通光

みしゆはやあくまひぬ。兼るつ。の。じ。よ。の。ま。ゆ。が
二の。と。と。お。の。ま。ゆ。が。の。を。り。て。あ。う。や。う。方。御。心。の。角。心

計の。深。見。の。ひ。じ。お。の。き。み。ね。ま。く。う。う。う。う。う。う。う。う。
か。れ。ハ。う。れ。ハ。あ。す。く。わ。す。又。き。の。角。を。け。す。の。腹。風。又。ひ。な。と。
安。な。わ。と。れ。と。お。の。き。み。ね。や。あ。か。は。風。い。う。と。と。
既。よ。解。た。跡。の。い。と。乾。う。わ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
う。既。よ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
差。刻。と。余。皆。つ。と。と。お。ま。ま。ひ。め。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
は。万。ハ。ま。ま。事。不。れ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。
と。
監。鷺。う。廣。度。ま。る。染。う。ひ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
羽。の。や。と。
吹。て。お。
て。ま。く。と。
と。

藤原秀能

冬月夜一やぢりアリ。難波にのまひる。そとこゆる。アリ。
冬月夜一やぢりアリ。よはせあら。冬月夜ハ、若のよしを
湖財のよし。又眺やきうつむか。お察して寝きゆ。ま
すいよかや。又眺やきうつむか。お察して寝きゆ。
波のよし。叶終。冬月夜よけく。湖乃芦のよし。波のよし。
氣氣限々。けよをあり。をとく。油だる。

まの

西行

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

夏首の歌。あつまつ時

性の歌正

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

前大僧正五箇

天の原アの煙の春のよし。霞。すくゆアのよし。
上の句。の。ア。エ。キ。キ。ア。ハ。シ。ム。ア。ム。ア。ム。
ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。

波よしうるく横雲と同はまし。あらゆるの音も湯辞をも。等。
一首のうへ、志きのちいにて、やの山の聲が、夜とぞもて、あくべりとひ。
あくべりとひのあい、やめばやりうきめどくちり。あくべりとひ。
五のあわてすしくじまをしゆるのよそと、さくよまきは。
霞とぞうてそくねんは、泊もあくまと、翠のよせす。曙
あうきを、生きは湯辞とくづくをきり。すすすと闇とぞくへれむと併へば、集の比、集の歌
えくへつとすとあらかじめのとトある。ほのこと
おあ今ぐんすくは、是と。世とくすすの湯をもる歌人あつて、
とく頬あゑて、とくよじつて、さくは、とくせくとくよじくす。山巒
とくうりとくねくは。まくのうのとくれもくろくまくとくめくの、室も
冬のやう。便うをしてとある事は、の夢をうけ、うれしとくとくめくの、
ヨシ真の御乃宿とくつて、大空よなむけ刻をうらとくとくめくの、
川。ねあけの、宣も上よ天原とあれど、もくわす。曙の臺と
あそわる。

やのくはとひまうそ。倉天を行ひまうそ。やうす。假謹と
ひまうそいそんすくとせぬ。あくまと。豪壯の氣勢。

晚霞

後徳大寺ただに

本の海の霞のまゝうす。心ハ入日をあふはき川の波
物句のり。やくあるへき歌入り。うへくじうめ
こ處のまゝすても同一事あれ。頬のまゝうす。
すの草すくすめ入日。うへくじうめうそ。
本の氣をもとをいきくとせざくと。のうみ志の後ねこすも
と。世中うそくすくすはまくおほくまくは世の事のす。

そのこともおとづりて歌よあくせむ。よ水郷春望

太上天向と青製

みまくら山すくす。じ水を飛川夕々林と何事すいし

は集株。清浦門の。とす事のあきのたの跡。や
り林ハタヒ浪といひ。しも見る奇トツム。上山台
モトのしきうのまきのたの朝。一ツア。ば。又林ハタヒ
小山もタタケヤ。シミエテ。オ。入林ハタヒ。ふ
ニ常の事。ちる。よく林。ある。ハ。よく今。うち
ナリ。これハ。それ。す。けで。け。川の。上の。匂。メ。セ。耳。そ。を。川の
の。つ。み。ハ。浪。湯。を。ぬ。お。れ。る。例。も。者。も。余。き。る。や。あ。ん。く。の。う。き。よ。声
の。う。き。よ。氣。韵。の。け。拿。マ。上。匂。何。と。く。せ。の。う。き。と。く。も。り。や。こ
そ。も。を。セ。タ。る。キ。ナ。リ。ナ。リ。の。う。き。と。く。も。り。や。こ
そ。も。幼。タ。ヨ。ミ。レ。ル。ナ。ウ。カ。ク。ナ。キ。シ。氣。韵。ハ。こ。う。ち。き。め
な。れ。も。求。ひ。き。跡。を。ま。さ。う。も。あ。す。ば。一。そ。の。ま。ハ。ス。キ。セ。川。を。く。ま。る
ま。山。か。み。す。し。春。の。タ。ク。れ。も。あ。れ。を。ま。す。の。タ。ク。れ。の。あ。れ。が。林。よ。ひ。ら
ひ。よ。る。と。と。何。と。サ。

振政家百首歌合春曙 家政紹ト

霞た川東のね山かの。一。波。と。よ。く。様。雪。の。室
未。れ。に。山。を。流。の。こ。も。り。の。ゆ。一。て。く。と。よ。く。か。
の。毛。代。集。の。う。か。れ。た。く。の。と。た。る。こ。一。矢。と。き。て。あ。
ま。の。た。山。を。も。と。と。え。ん。と。あ。う。や。だ。ハ。よ。流。の。う。え。く。た。ゆ。よ。
す。も。な。れ。し。波。の。こ。ち。れ。す。と。あ。う。と。お。ひ。た。る。流。す。ち。一。霞
た。つ。と。や。の。と。う。け。わ。へ。ア。け。こ。の。う。く。ま。の。ね。山。と。霞。よ。が。
も。が。の。と。あ。う。と。と。あ。方。へ。と。れ。り。一。首。の。と。模。雪。と。そ。て。と。峰。る。方。で
は。手。す。く。ゆ。す。る。お。そ。ハ。浪。の。上。よ。が。て。け。す。く。と。そ。
上。の。急。圓。大。傍。山。の。霞。よ。す。い。く。と。そ。一。は。ま。へ。
れ。も。歌。は。ま。さ。い。め。と。そ。れ。と。歌。よ。け。す。く。ハ。ん。や。

す。山水のうきめもくらむやうして。いとん
いきめもくをほくうじゆくもくめう。

守覺は親王が辛酉歌、來とふか一井本は元の城を守覺

藤原定家朝に

春の夜の星のうき橋とて峰とて横雲の
とて山をいとんだめよ。爰をまのうき橋とてくわ。
まのとて後宮のとてうきをま。また運
きふやうの舞をだくせあいとて。三夕の下よしとてくわ。
御ちよどれもいとまよたふか。嶺より下よしとてくわ。
嶺より下よしとてくわ。すだかくよみてありへきす。
ねりと峰もよみとて。爰もとだりとひをな。太極と峰
よみとて。峰のうなぐとて。それと峰はおまをとるほどもあ
よみとて。すされをみまくとて。萬葉のえまの志傳。又神山よみとて

なまく川入江をよぶがや。桜く岸の風の向
とてうてふんばくとてあれけくち。四夕まとてほぢ
つて桜雲のとてよりすまのとて爰のけく
うくよしわんう。上のうの春の夜の眼のさむるとてのう。
夜のあるをとと。なほり本を爰のうきべとてへと。いわのぬ
木を出るよと桜雲のあとし小言の文まよといとせた。いわを
き能しとこのつたはまよとてわくもせ。いわきまよせ。いわす。
すて峰のとハ酒巣とて。かねやくとくきまよせ。いわしつて。雄
壯の氣うせて。景氣うせて。あくとく。あくとく。峰もだりとく。
こくねくよとじをとく。きははうじとく。きまをやひてとく。
おれのとくとて。今歌はまのうて。よきよあくせて。公の
夜の泣か。爰のとだとお夜のみうき声を思ひせ
たまへなし。春の夜の人うきよと。中とよ音を残る
べきよめをや。ものあひ陰は秋のうきよと。とてとひ爰の

はきハ夜のうきよとおもはる。春の夜のやうきよとおもはる。秋の夜のやうきよとおもはる。
へきゆゑやとおもへとしきに變じてハシダのゆへなどと強きやうじゆ
一ツの聲。やさしくてかわいどす。声の中だすよ。
ソレの聲すずらうれをきの本とうめくよ。

大そひ梅のうれいすづくづくやほの身の歌

二三の力とあがむ空よ梅うるのうらうとくともな
せらへば流のゆ。ばくゆうとそのことじし。歎きまの月
うあつてすいやうとよきゆうとあらわす。梅うるの空うらうとぞ梅
う事房とやうらうとよきゆうとあらわす。うめうとぞ。它的
くとくとあるの趣をもとめて。お哥の趣をもとめふあす。うめう
アラ某すすめうとぞ空のゆの春の月のは万えすうとくねだらう。
ちやう月やうくわくとぞ空の春の月のは万えすうとくねだらう。
たと木の月の月の月のうあす。月のう合あす。月のう合あす。梅のう
うめうのうめうして下す落りえとふとわのう。何うもとじ。梅のう
うめうのうめうして下す落りえとふとわのう。何うもとじ。梅のう

け合ひ鶴をき故ばくゆ。びくを除きて下すとよ

べりきこのゆ。しのぐのうを詠誦みいはむ。うも流れてよ
うかくとぞきのうがれとあらわす。うきくとあらわす。
のうきくとぞきのうがれとあらわす。うきくとぞ空の風貴へ或人のうだ室く
うりあげくぬのうめう。梅はく山の月をうめうと
あめうとす。はく山の月をうめうと。うめうと
たねと。まめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。
うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。うめうと。

百首歌をより付

梅花とよひよひす神のうわらう月のけぞりよ。

一そひのまへ梅のうみのうかいを神のうよへせばれぬのうけ。かく
一月とまへあらうと月の神とて月の神とて月の神とて月の神とて

は歌うへとさきど。あ
あくまわなむなりす。

家隆朝臣

梅もさくととい春の月もくねりとゆまつむ
伊勢の業平朝臣のがわわぬまの歌の臣
こそそ。の御のくとてとく哥ちわ。おやうじつ
は万ある事なし。たま。そのそり力あひ。とてすの
の體かうへ。わふ下。おそのそり力あひ。とてすの
そくそくとつてとく。方敷の袖と袖とよ。ソ
首をとして酒のくとあら。月のくとちて。毒
香のくと半と半と。及ひときい。あま。花のく
と。一首のみ。出で。たまの事で。うづぬ袖とよ

よとく。あくまくとくとて。月をくとよ。おち
をくとよ。とくとせす。と。まの御の袖とくとよ。
け流のくと。業平朝臣のくと。とあくまくのくと。き。ま。高
いきて。おき。くと。何と。き。くと。を。ま。くと。おれ。ば。た。くと。よ。

千五百番奇合々 右山門督通具

萬花た袖すれ。匂い。そと。と。と。と。と。と。と。と。

二の匂すき。身のくとく。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ある。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

春や。の。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

哥としりすとくつりてせ。夕よみうのうのつ首の
をとみ。或と彼のまこととめしれど。月やあみ
すとけあきよあすばくとたうとすなれ
とたうの傳たえ。なれ。活用也。此歌とてそばに小
波上うのまをとめて。とやひで多う。かういきるよゑまとじうの方。波とや
月もしりの春のまことの月すれ。首のすりをとく
たうへすれ。首たう袖とく。名残の匂いと聞し
とく。翠上山元のまこと。何とすき懐古のうゑ業平
のま車の春をとみとりすを思ふ。だふす。

皇太后宮太子後成女

梅たあねまもじりとぬす。放見のまのねの月
梅たあねまもじりつきとる。折てすりうの歌

の詞すり。昔を念よきのまあれ。木歌といふもあ
らす。されちどこの門をいそがす本引すり。さうまをくもとくよりもく
ハ五條の西村のまことする。娘をうなすし。上の娘めたり。御作と曰
く。一ノ年流す入日すりとも。何とすき
脇ちの辛。住むゆかぬの義あるす。とて青とといふよ二有。
首とすりてヒトとゆ。おきととえしりのまもと
うきらぬととすり。うきはほのまをすり。おきと
歌との住むゆかぬのまをすり。はがきのほのまとと。何を
ちのゆくしれ。あとし。考とし。考とし。一ノ年全むすれ。とほくめんす
いとむれ。おとし。常むじす。もと。もと。おとし。わくと。あ
ぬと。袖のえよしれ。と。首と。じりせと。あ。と。あ
ぬじーのまをすり。あ。うねハ歌をじー。ハ。歌を。うね。うね。首
ひきと。一。首のまを。我と。うね。は。おと。ハ。歌。あ。うね。う
きと。す。一。首のまを。我と。うね。は。おと。ハ。歌。あ。うね。う

もとそ春夜の月と同く。此ノ月と秋の月とあぬしの放
そのせのくみをとす。此ノ月と秋の月とあぬしの放
見とも月のこす。秋元のきももむじの
ゆもそひす。此ノ月と秋の月とあぬしの放
とソホつきをとす。此ノ月と秋の月とあぬしの放

歌 等

西行

梅園うちこまかとくもへんとくよくられ
お二ごとくを次第へとまし。ソシカクアラモシガロヘの
匂へとくりはとめこくの上よつけてとめく。
け不思議。下年は师のやりす。以上人ハ金固の右
のまよみをう。下年は师のやりす。人間のえふも
各利不思議。下年は师のやりす。人間のえふも
あくソシカクアラモシガロ。あくソシカクアラモシガロ。

をひき。あらかじめ入るをとれ。岩の下水あり。首のき
をと。かいてば魚の骨を涸げ上のやれ。いも。首のき
のねづか。萬さうそ家をとめ青り人とめ。うときる年も
疎をあらむ折よあらぬと。今とくは薄野とせふ。
とてとくも折りよとく事かれは稀たのはく。
あるが家をはうとまくをわく。あらかじめ入るをと
く。まをとくとくもとく。人とくはの處

百首歌をりよまの歌式内親王

まやうやくじよそりぬよもとくの稀公歌をとく
我をすりて。昔の今すりぬ。かく。昔の今すりぬ。ハ昔年
た。ち今のは昔の今すりぬ。人の歌をせ
換わだす。おのづくもとく。かく。かく。かく。かく。
と。思ふをとす。一そのそと。おやうひよして。おはの稀をうづく
えあたるをとす。おやうひよして。おはの稀をうづく

まよふをりてお捕る事もあらず。捕らへりまづけり。を
うそにかをあらゆるよきをより。捕らへりまづけり。を
つくへり。思しわらんとあらモ。一きをせきと捕ハとせえ
てあられ。えりて。まづけり。はとす。まであり。あらんとふ
とむと有年とあり。も。捕ハ。未だ參よ。とくとく。寄し。ねた
在在すきを。今ふとのまえ。ま未だ參よ。とくとく。寄し。ねた
あれきつら様のねた。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。

なー。

上古門内大吉家とある扇油

左原右家相馬

散めりくもいともうとうのたよりとや神よ貴の歎
二の句のをり。すもゆととふとす。散めれと

ハ。重新ておもろ捕らのうへーを。いや。けやくよ
三れハ。神と幸ト。安。おもぞれ。か。り。ふ。神と。か。く。ま。く。
わだたう。と。わ。ま。ね。もし。が。引。と。ま。う。と。神
い。と。あ。も。そ。お。つ。く。神。と。身。あ。た。あ。つ。く。心。か。あ。す
一。う。し。一。の。を。出。の。だ。放。れ。か。ひ。ハ。も。神。と。残。て。か。み。を。
ま。だ。た。う。有。と。身。下。で。家。神。と。身。せ。く。と。も。

題一

八條院高倉

ひとのますとて散ぬれのれよばらたち人べとしむ
か。欲。人。を。て。散。く。ま。れ。の。れ。よ。ば。ら。た。ち。人。べ。と。し。む。
と。だ。う。れ。じ。ち。す。も。あ。と。め。の。く。る。う。ま。た。う。よ。ま。と。ま。る。
ま。の。今。い。と。身。オ。と。と。本。欲。つ。と。と。ま。る。
ま。を。ま。禁。を。か。が。湯。だ。と。身。通。と。身。向。

百首歌合一冊 源興親

駿波もすまぬにいとまうらうしとまゆも月登
山のよびつも月夜も故にすまぬ
瀧れわむ月夜もすまわといふ。まのき。
まのきのをほしとひなむすあれと。まくすまくは木橋と月
けしやのうちたるすあうがくとばがみの家とよもぎの河原た
三のきとあらあは今どくもくわくもくとまのえいりへそだ
くさんぶしきなればよはせと高せうきはるも上うきまく
度くわくとおざくはうりとくわくは援急の勢いとくわくはれと
結白とくわくは強弩之矛不能穿魯縛。さくじつまくは
は先達のいとめでたれかくとくわくはれとくわくはれと
たのま月をとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれ
物事の必ずすとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれ
とくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれ
とくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれ
古ヒ原を華てきう遇くわくとくわくはれとくわくはれとくわくはれ
うのまうとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれとくわくはれ

本末一參。
福見解ちう。

攝政家百首歌合一 宋蓮は師

今そそはしのこむとひね曉月夜のゆの室
上勾二三才次第してきく。因縁に伊勢ゆ邊の
歌よりて「の歌」と多くはとくまくへ更に羅
の思。居しのゆくへんつとくまくへゆきゆ。
あるの近一きのきと。贈はんの叶はず故にばく
たやうよもく。すてゆく立はずも。を漫くいきかへ
すきかへ。れくにまくまくはれも。どうしよ。かくやうそれ。古
人の氣象とやどさんくはれくはれのばくきよきよはれ
うあやうく。そん一きのきは田東の鉛月夜のあがのゆきよきよをと
く。うなづく。かくやくよくすなとく。瀧れわとく。とく。因縁
けふをうごく。とく。うごく。うごく。

こそ。まよふやうに。春の因のよもよし室を。二の弓が今、
偶次へとて。とまをまくら。け合の事す。三の弓が今、
たるて。ゆくもの。をす。じよくたぐひ。まの仄の風を。
古歌よ。秋風よ。物ノクのそめゆす。秋風よ。はそき
らるむ。せとめうて。よをあり。秋風よ。弓をとまをせたる奇
弓の弦の音と。さざれ。たゞ。橋原。弓のあれから。半弓なり
じの仄の音のえと。まよく。うら。橋原の弓のえ。それの秋の氣。ハヨリ。すき
られと。すまく。仄をまよく。弓を「の弓」とある。よびき
ハ源流。上下。弓をとまん。とま。弓の氣。ハヨリ。すき
教。下の弓をりきれ。こせ。ざ。の弓と。じけの物。を教うば。よびき
よびき弓。弓の弓の配。弓と。よびき。筆と。弓の弓。教うば。よびき

よびきをとて。ゆく。

百首歌より附

ゆくと。あらわす。月と。花との名。と。それを

改月。改月の弓をと。見す。ゆく。弓をと
みす。あらわす。弓の弓をと。月の弓を
弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
下夕よ。くあす。と。よき弓。弓の弓。改月。改月
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。
弓をと。弓の弓。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。弓をと。

あれども元のめぐらしの門のすゝむへりぬけらす。
此難は嘗たき事もあらずのみかは・上りはりとひさひとひ、下り月とひ
春といいしん合掌のゆきとしげ歌すほほよりかんべとまきすちねんよれ
とまくらほのわらが・上下ひくひといとすせぐの猪ぐるとのものあらずす
あらうて・下りくろ何ともおとしとぞすれりおとくらうとむむく。
ほづるはまつりきあらずす・莫を
えと答をとすととふりあらまく

守覺は親王家五十首歌、定家の和音

暮する處・とてお・广林のゆきつむじは暮を降
あよつてお・それてあらーしの・とて暮を降
ゆうと・おをの・をまゐの方・といせつ・とおをよ
ひ・と・えゆうと・とく・と・上ひさぎの林より下りゆく
お・あつ・と・おと・たの・よ・れ・お・お・くわなされ・

昔の歌の趣もよしもよきのよき・よき・よき・よき
たき・たき・たき・たき・たき・たき・たき・たき・たき
するは秋風を・と・よき・と・よき・と・よき・と・よき・と・よき・と・よき・と・よき
比の歌ハ・新奇をつとめて変幻万差をうづ陽でぢうだね・あす
百首歌より付 摂政

雪き・おち山の・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・
よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・
よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・よ・

延仁元年二月秋令より度障遠村

院中納言詮経

高嶺より六田の淀の極原みそくすし春うわ
淀れ水のゆきよじして綠もくすすと。樹の
全の流れ。淀六田の花とよびて。并が池の水の深淺
本。けがくとよきよき。のりのり。あらうるどそくに。富のあは
の山。山。すくらぬま。よめ。あらうるどそくに。うきは。
一きのま。六田のまの極原のみそくすしきみて。いふ
歌辞。下句。門へきしたれ。じよみ。さくばく。みねる、
ゆく。かほと。枝の緑の色を。ゆく。むきへき。うれ
やくへつまく。す。なす。し。根原。よ。まく。うだ。底の。よ。まく。
まく。へ。ま。年。ま。め。ち。き。よ。まく。は。た。ま。い。山。の。花。の。う。まく。まく。
年。まく。の。う。まく。よ。まく。の。う。まく。う。まく。う。まく。
まく。と。能。た。まく。へ。根。の。障。の。ほ。の。と。バ。と。まく。う。緑。と。ゆく。

と。り。く。う。と。を。底。し。か。こ。う。の。ほ。き。と。い。あ。く。よ。ま
あ。ゆ。れ。と。そ。や。き。と。り。ほ。と。そ。ゆ。き。と。一。唐。じ。し。と。そ。ゆ。の。ゆ。き。と。
ハ。は。そ。う。
せ。そ。し。

百首歌詮経

般若門院大輔

春。を。の。高。嶺。山。き。と。と。え。ま。よ。り。と。そ。れ。て。と。ひ。と。も。極。の
画。の。み。く。や。さ。く。よ。し。め。し。き。歌。ち。を。と。あ。
て。ゆ。れ。た。る。は。ま。上。る。と。よ。そ。り。と。わ。

千五〇番歌詮経 原原雅経

お。む。れ。た。る。す。と。と。も。も。歌。の。う。き。山。よ。者。ゆ。く。吹
き。高。嶺。ち。高。嶺。の。花。う。と。く。る。を。や。て。ち。山。よ。生。う。

柳用シナサケトセハ風ナシモアテキシム
クをナリハハムモトモシムレのトモリシテ
春風モカシトモアタハ柳のトモリシテモ
風のトモリシテシヤカラシテヒテ上は流の
ま物のトモリシテ下は春風のヤドホヤのヨリその舟ハ常ある
ヨリツミのめをなきハ始アリテメアリタキヘビタキの事すアリ
ス。其の事モタムアリハムシカニムシの事アリ。或人柳ハ山の上
ハラフキ山でも風うらと風うらとす。或人柳ハ山の上
あらわす御子ル。又家臣御子の事。あの
松山城ふげを横雲をとどけしも。もう一辯
歌の例セシム。山の上よ松をとどけり。此
二句タキタキ。山の上よ松をとどけり。此
集の二句タキタキ。山の上よ松をとどけり。

ヨリカシム。山の上よ松をとどけり。眼をとどけ
テキセシ。山の上よ松をとどけり。山の上よ松をとどけり。
風うらと風うらと風うらと。柳ハ松川堤波うら。水をとどけり。山の上
風うらと風うらと風うらと。柳ハ松川堤波うら。水をとどけり。山の上
と御山。柳は松川堤波うら。水をとどけり。山の上
と御山。柳は松川堤波うら。水をとどけり。山の上
と御山。柳は松川堤波うら。水をとどけり。山の上
と御山。柳は松川堤波うら。水をとどけり。山の上
赤毛ハ。わがよとあるより。用さる。

有家翁

まやのよとあく。しのの生とも、くはあく。ゆく
へゆく。ゆのゆく。まよとあく。しのの生とも、くはあく。
のき。まゆ。ゆく。世の生とも、くはゆく。まゆの生とも
といふ。まゆ。古事記ある。こ。松邊元輔。まゆの生とも
あく。くはく。くはく。の生とも、くはく。まゆの生とも
ある。くはく。くはく。の生とも、くはく。まゆの生とも
ある。くはく。くはく。の生とも、くはく。まゆの生とも
ある。くはく。くはく。の生とも、くはく。まゆの生とも

三句の言つせむがだきとしきハ松風といふやうな風す。そして音もさう
うといふ。一句りお詠ねる事もあらず。たゞぞよしと。あとをかくす。たゞ
とへ誰へうそはんまちあくとも申す。まよ。正に用ひぐきこと。玉公家
歌つものからいきぬるひととくふある。もととくふある。
もとせあり。下るよこらるみくわくわくの

きくふとく用ひり。いそうちくじ。

宮内船

アサヒの緑の緑のつみかはす。跡すて。アサヒの村辯
跡とく。ちのきえ黒やる後をくちく。ちの緑の
門とて。あわき。あまわけり。立て。くちく。慈の舟。ハ。そくす
やのめだきをくらべ。とすゆすれ。機とくまし。そくめや
て。こさうとく。とく。舟大とく。そくあをとく。とく。さくを
す。葉すれ古と。そく。行ふ。もく。かと。そほする舟のすく。草。し。あく。氣
韵とく。人の疎漏。ト。ソク。かかき。うれと。草くハ。舟の舟とく。そ
く。原の本色と。だす。ふねくさを。くく。かく。うれと。寫句。じ。めづく。もと
すく。どく。くのう音と。すく。ま。漢賊反覆を識者。くひく。もと

残ら守辯黙ての後まで船の村辯のえりとく。
あるべく残たぬふく。差手のえりとく。船たぬふく。
首のこぶゆくのえりとく。の。とく。す。お。船とく。とく。後を
い。ね。法。とく。西。下す

西行

アサヒの緑の緑。もとく。ちのきえ。黑やる。後をくちく。
ちりて。く。う。舟。れ。の。く。く。へ。い。く。の。二。き。の。お。音。や。山。一
つも。散て。二。き。の。舟。ハ。ま。う。と。く。と。う。と。う。ト。く。舟。の。ま。う。
ハ。ま。う。う。と。う。と。う。と。う。ト。く。舟。の。ま。う。と。ハ。せ。ば。序
の。ま。う。う。と。う。と。う。と。う。ト。く。舟。の。ま。う。と。ハ。せ。ば。序
の。ま。う。う。と。う。と。う。と。う。ト。く。舟。の。ま。う。と。ハ。せ。ば。序

攝政家。西首歌合。船家。瀬翁。

井水と。と。と。と。と。と。と。すり。れ。ぬ。花。の。青。の。ア。ウ。セ。を

本番の山よりして、まく。勢はるゝ事の多くあれ
一とふがやう。二の匂ハ勿傷丸のちりをも。本が
よなれどあるとおもむけたけとをもるおこ。すとくな
けの化のほら。まく。いさかひまのじ。まく。そんねくまの化
ふす。あらそくしてさてはぬみ。六番歌合の判よ。素
をあげ哥のが哥とふぐりあす。六番歌合の判よ。素
性う哥を取るだよいへれとはハあす。そつ。本哥を
もは。多くハキムとゆすハ材のもの。をひく。まく。うりとやう。
うきをとて趣をあらぐ。それをうし。人ハ奪体換骨と。奪体換骨
ひきりえくわたらを名譽をす。うだり。ハカくて。おのほ
うをめつて。ヒハ古方をとらむ。常いふと。うのま
細ハウ。ゆゑや。一のきハ氣のわざと。まのじ。とせむ。
うきをうす。田うしれたをと。花のやうと。うれ。まのじ
じう。うす。うす。精ね。うがわづらる。
きく。れは。まかしの。う。様ね。うろく。

百首歌合 冈 式子内親王

今はくまぬとまくとまくわからぬすのくま
物句ばくをす。今とくまハ乞ひとてよみえをと
す。ゆく。けり。わすはゆくとす。きはくれと。け物句
一タきり。とハ。まゆめ。すやん。そよひす。うき。うき。
けく。ハ。けく。を。けく。と。と。ハ。上。う。あ。う。の。と。と。と。ま。よ。す
めの。雄。壯。ケ。ち。よ。け。あ。く。ね。あ。く。お。も。達。勢。を。ア。ト。ト。ト。先。モ
ハ。行。の。く。の。照。紅。を。の。こ。も。と。せ。陽。の。照。紅。と。く。を。さ。う。け。の。照
紅。と。お。す。き。と。お。ち。れ。と。お。れ。と。じ。ね。と。ほ。せ。う。き。と。や。ひ。め
の。う。き。り。く。雄。偉。う。き。歌。方。の。二。の。匂。と。世。の。く。き。の
は。や。よ。み。ゆ。く。け。か。す。う。ハ。俗。う。く。ま。う。は。う。う。是。た。と。え
て。と。ふ。き。れ。う。く。う。へ。と。す。え。と。と。ふ。字。く。ま。う。に。の。匂。答
の。う。き。よ。す。う。と。い。ふ。と。け。う。う。う。く。ま。

うむ。けおはまのうきよをりて。せじうすすりよすじとくらべ
うむ。けおはまのうきよをりて。せじうすすりよすじとくらべ
のうする。一そのかはまくはくらはたとくそ。又とき世よ秋
世上のうきよ香よをりて。うすくすくすじとくそ。又とき世よ秋
くらすと多くもしよかへ。ほよゆきにゆす。
俗言よ。まよ。秋よすととし。アのとくれ。
俗言よ。まよ。秋よすととし。アのとくれ。

たのう。

西行

芳野山とみのしきものひえてもとあの方の話をあん
ぐくとくのへり。一そのかはまくらはたとくそ。又とき世よ秋
んじで。まよ。秋よすととし。アのとくれ。
まよ。まよ。秋よすととし。アのとくれ。

わ歌而そまの歌。疾速

うきやなまのはう。咲よきり立田のやねくも白雲

立田のはう立田の奥。二の山よつてやとふりあ

らまや。一やとふりあ。けの

百首歌たてまつ下附定家朝

お雪のあらわたり。立田山をうの峰よだるやとふり

本歌。白雲の立田の山の峰の上の小倉の原よはら櫻井
たはまよすと。共ハ付ねて。坂井よもじや。立田山
よもじ。共ハ付ねて。立田山よもじや。立田山
事。立田の山よもじや。結句はめり。もと。今を。匂を。匂を。

とあは門。いさり。物わざと。げ歌と。匂が。無。無。無。
たはり。はら。もの。もの。もの。もの。もの。もの。假つ。假つ。假つ。假つ。
一そのかはまくらはたとくそ。秋よすととし。アのとくれ。
大き立田の小倉の峰よだるや。立田の次を。家衛朝の哥も
立田の次を。家衛朝の哥も

おとす
花うららのうとく

メドガキ

題一ら寺

藤原家衡朝臣

告聖山がや威よりくさんかくわくぬ峰の一ら雪
一きのそとあのそハモトモモトて告聖山の元はけりよまて。まを
うんづくとさるのてあく。雪をとへあるも。まくか峰よりくわくす
よあれハあつのあくを
はくすてかちふと。

和歌而歌今よ囂旅た雅経

岩根あまかさとくら山をこどすてくだいと。のゆのあく雪
伊勢御宿よ。岩根あまかさとくら山よ。あねもし。二のうみ
湯勺ハ序。たさうの山を。ばくとももす。ほてえく。れく。
詠の方よ雪うりへとまき。あれ大きえてあるまである

五十首歌年一回

ひうね生てたようとするわのうすの行くわなき山陽の
二の夕。元をみてうせるよくあす。年休もてい方
たるすてて當るよ。花をうめで。ちたさうする有る。
またハ俗よよきとよよあら。そよよよよよよよよよよよ
らす。れきよよきよよきよよきよよきよよきよよきよよ
のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
たよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
ね事てとよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
じよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
山安はやかよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

月のあづまとよしと力のどながひをいふとふ家
うゐるべしとハ向の玉井より家すにかよ辞をいふとよしとて家
いきと山の月のきりとよしと後代へちとわざは舍と
たまくとひだりとよしと下多喜の官室をかみふとよしとくらふと
降情よ
あるべしと後成の奇く宮は月星とちづ方とせえ
たり後成の奇く宮とあつまつて家とよしとて障籠
あゆみ集るとはま左の風
も月齋おれなまえり

故郷

慈因大僧正

ちううすくとぬねかつのあらきだま春うてを吹
あらきだまよとあらきだまさいくあらきだま
よとあらきだま

せすせとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わがのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
やわと丘と丘と丘と丘と丘と丘と丘と丘と丘と
あらきだまよとあらきだまよとあらきだまよとあらき
よとあらきだま

千五百番歌合

通異卿

いとみのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おとれども無人ふる人をと春ハ必らずもまづく。今集の中
秋日ノリトモをばつて、あわてて、そぞろと、さきとを
のまへ音のたゞし。おとすお音とくろ音か。うつまくそ。やまを
いじきと。じとくとて、おとす風音す。おとすの林す。すうて又古木
よ入る。あるはる音とまはる音もとて、おとす音りゆ。世上す。何とくはるや
是をも含む。シテ、おとす音りゆ。それもおとす音す。これもおとす音
がく。おとす音りゆ。西音歌合をとせば、國をも一事もく。義雄豪傑は
才をもおとす。おとす音りゆ。おとす音りゆ。おとす音
いきりおとす音りゆ。おとす音りゆ。

三位秀賤

たそくのせまかひて吉野村宮の春のめの
たそくのせまかひて吉野村宮の春のめの
三とサス一とく

百家紹ト

朝日紅葉山のほくとつれすまきぬおとすと

あくたの朝日あわせ色ハとすすむりて、減不
雪のことすりて、朝日けよ山のほくと
葉のほくとすれ朝日紅葉山のほくと
朝日けよ山のほくの向へる朝日けよ山の構のほくととすすむりて、減不
して、あくとそようすけあすけ歌もあせのとく勢り。けのよ
又向けよとすれおとすけあすけ歌もあせのとく勢り。けのよ
朝日のけよとすれおとすけあすけ歌もあせのとく勢り。けのよ
えんじつとすれおとすけあすけ歌もあせのとく勢り。けのよ
けよとすれおとすけあすけ歌もあせのとく勢り。けのよ
あり。けよとすれおとすけあすけ歌もあせのとく勢り。



